



TITLE:

[書評]Walter Sinnott-Armstrong
(Ed.), Pyrrhonian Skepticism -
Oxford University Press, 2004.

AUTHOR(S):

澤田, 和範

CITATION:

澤田, 和範. [書評]Walter Sinnott-Armstrong (Ed.), Pyrrhonian Skepticism -Oxford University Press, 2004.. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2012, 15: 78-82

ISSUE DATE:

2012

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/173156>

RIGHT:

書評

Walter Sinnott-Armstrong (Ed.),
Pyrrhonian Skepticism.
Oxford University Press, 2004.

澤田和範

1. 懐疑論と認識論

知識の理論を提案しようとする認識論者は、「懐疑論」とか「懐疑論者」と聞いたら、不愉快な気分になることが多いかもしれない。懐疑論が、自分の理論に対して挑戦してくる「敵」だと、まずは見えるだろうからである。認識論的問いに肯定的に答えようとする哲学者にとって、懐疑論と対決し勝利するということが常に重要な課題となってきたことは確かである。だが、それだけで話は終わらない。もう少し考えてみると、懐疑論が認識論者の倒すべき「敵」だとは、簡単に言い切れないと思われてくるのである。

高名な内在主義者チザムは、かつて次のように論じたことがある⁽¹⁾。認識論者は認識論が成功し得ることを前提する。つまり「自分自身に一種の〈信〉(faith)を持っている」。この前提は正当化されるだろうか。正当化されないと考えるなら、認識論を遂行しようとすることは合理的ではない。しかし正当化されると言うことも、論点先取(独断的想定)になる。だから「賢明な認識論者は、彼の〈信〉が正当化されるという命題を信じることを暫定的に差し控えるだろう」。その上で探究を続けるのは非理性的ではない。

このチザムの態度と探究の継続へと至るロジックとは紛れもなく懐疑主義的である——その理由はすぐに分かる——。懐疑主義が本来「探究の継続」を意味していたことを(本書では直接の話題に上らなかったけれども)ここで思い出すべきであろう⁽²⁾。

このように、「賢明な認識論者」と懐疑論との関係は一筋縄ではいかない。それなら、単に懐疑論を論駁しようとするだけでなく、懐疑論から認識論的洞察を得ようとすることも重要ではないか。我々が認識をどのようなものだと考えているのか、あるいは、どのようなものだと考えるべきなのかを教えてくれるのは、むしろ懐疑論ではないのか。

本書『ピュロン主義的な懐疑論』は認識論における哲学的懐疑論を扱った論文集であるが、ここに論文を書き下ろした研究者たちは、そのような、ある意味でポジティブな懐疑論の捉え方を——それは正しい捉え方の一つだろう——よく知っていると思われる。

2. 本書の内容 (1)——ピュロン主義の重要性

哲学的懐疑論と聞いたとき、思い浮かぶのは誰の懐疑論だろうか。デカルトの名くらいしか思い浮かばなかったなら、本書はそんなあなたのために編まれたのだと言って良い。本書の編者 Sinnott-Armstrong は(序文において)、現代の認識論者が懐疑論を考えると、その関心がデカルトに集中し過ぎているという現状を憂いている。この場合の「デカルト的懐疑論」とは、知識の不可能性を主張する懐疑論として特徴づけられる懐疑論、すなわち、「(ほとんど) すべての領域にわたって、誰も (ほとんど) 何も知らない」という立論である。しかし、Sinnott-Armstrong によれば、そのような懐疑論を現実に主張している哲学者は知られていない。つまり、認識論者がしばしば行うデカルト的懐疑論に対する攻撃は、いわば「誰も守っていない空っぽの城」への攻撃に過ぎない。

しかし他方で、デカルト的懐疑論とは異なる懐疑論、ピュロン主義が古代ギリシアから近現代まで綿々と血脈を伝えてきた⁽³⁾。ピュロン主義こそが生きた懐疑論なのである。だから——と Sinnott-Armstrong は訴える——ピュロン主義の是非こそが盛んに論じられるべきなのに、現代の認識論の現場や教科書でたいい無視されているのはおかしいことだ。本書は、タイトルにわざわざ「ピュロン主義的な」という限定が付いている。それは、本書が論じるのが他でもないピュロン主義なのだという意識の現われである。

3. 本書の内容 (2)——ピュロン主義とは何か

ではピュロン主義とは何なのか。それが本書全体のテーマである。本書は、ピュロン主義的な懐疑論の歴史背景を論じる第一部と、現代の議論について論じる第二部とに別れ、双方に同程度の分量が割かれている。各論者は皆、ある程度は自身の関心に合わせてそれぞれの独立した議論を展開しているが、基本的に Robert Fogelin (1994) の懐疑論が強く意識されている。Fogelin (1994)こそ現代の「新ピュロン主義 (neo-Pyrrhonism)」の代表であり、彼はヒュームやウィトゲンシュタインはピュロン主義的懐疑論者だという解釈も展開しているからである⁽⁴⁾。

そういうわけで、本書の読者は、まず第二部の Fogelin の論文を読んで、ピュロン主義者自身から、ピュロン主義とは何かを聞いてみるのが早道だろう。さしあたり押さえておくべき論点は、ピュロン主義的な懐疑論とはどのようなもので、デカルト的懐疑論とはどこが違うのか、という点である。ピュロン主義的な懐疑論の典型は、ある意見を別の意見と並立させ、一方が他方より認識論的に優先される根拠が不在であることを示すことで、どちらの意見に対してもコミットメントを持つべきではないとする議論である。Fogelinによれば、ピュロン主義とデカルト的懐疑論との最も重要な差異は、デカルト的懐疑論者

は「強く否定的な認識的評価」を下すが、ピュロン主義者はそうではないという点にある。例えば、デカルト的懐疑論者は、「水槽の中の脳」などの「哲学的シナリオ」を用いた議論によって、知覚は外界に関する知識を我々に与えることができないという「経験的知識の不可能性」を示そうとする。それに対して、ピュロン主義者は、例えば、互いに対立する複数の知覚の事例を持ち出すことによって、特定の知覚に基づいてなされる知識主張に疑いを投げかけるのである——「それは間違いかもしれない」。この懐疑論が、その知識主張が誤りであることを証明しているわけではないという点が重要である。ピュロン主義者は「哲学的シナリオ」にコミットメントを持つ必要はない。つまり知識の不可能性を示すという立証責任を免れているのである。「誰も知識を持たない」という主張は、否定的独断論の一形態である——ピュロン主義者以外には、これもしばしば「懐疑論」と呼ばれる——が、ピュロン主義者がその懐疑論によって反対しようとするものには、肯定的な独断論だけでなく、否定的な独断論も含まれる。この点がピュロン主義の核心である。

4. 本書の内容 (3)——各論から

ピュロン主義を歴史的観点から論じる第一部は、現代のピュロン主義者と古代のピュロン主義者との関心の差異を論じる Gisela Striker の論文で幕を開ける。次いで Janet Broughton は、デカルトが、ピュロン主義者ともデカルト的懐疑論者とも異なる議論を展開したことを論じる。この二つの論文は、現代認識論の立場としてのピュロン主義の姿を、他の立場との違いを指摘することによって、より判明に読者に理解させてくれる。

Kenneth Winkler は、バークリが、ピュロン主義者の用いる懐疑的論法の一つ、「相対性の方式」への対処を意図していたと論じている。バークリは、懐疑論を回避するために、観念と実在の区別を拒否し観念論へ赴くだけでなく、さらに感覚に対する理性の統治にコミットメントを持つ必要を認めたが、それでも不十分だった。この議論はバークリ解釈としても斬新であるが、相対性に基づく懐疑論のやっかいさを示すものとしても興味深い。

ヒュームを論じるのは Don Garrett である。彼は、懐疑論の射程と強度を示すいくつかの分類——懐疑論を論じるときには非常に役に立つ——を導入し、ヒュームの懐疑論を恒常的で・一般的な・緩和された懐疑論 (constant, general, mitigated scepticism) と見る。彼の議論に問題があるとすれば、自分の「新ピュロン主義」の先駆者としてヒュームの名を上げている Fogelin に反して、ヒュームをほとんど非ピュロン主義者と解釈している点だろう⁶⁾。本書の趣旨からすれば残念なことだが、Garrett の議論からヒュームと新ピュロン主義との関係について得られるところはあまりない。

ウィトゲンシュタインも Fogelin によってピュロン主義者に列せられている。Fogelin

によれば、「哲学（的理論化）に対する懐疑論」はピュロン主義の重要な要素であり、それが後期ウィトゲンシュタインに見出されるからだ。Hans Sluga の論考は、前期の『論考』にさえ「言語批判」と「哲学に対する懐疑論」を見出し、その由来をフリッツ・マウトナーに求めるものである。Sluga のウィトゲンシュタイン解釈の是非とは別に、マウトナーを「ピュロン主義的」と呼ぶことが適切に関しての議論があり得るだろう。

さて第二部は、ピュロン主義の是非をめぐる議論が、各論者それぞれの視点から展開される。Fogelin は——以下、評者は本書とは異なる順序で紹介していくが——基礎付け主義や整合性主義、そして信頼性主義や文脈主義などの現代認識論の主要理論を、彼自身の「新ピュロン主義」の立場から検討している。いずれの理論も「新ピュロン主義」には対抗できないというのが Fogelin の主張である。

新ピュロン主義の懐疑論がこれまで試みられてきたお馴染みの認識論的理論による反撃を容易に受け付けないだろうということについては、論者の間で一定の合意が得られている。では、このピュロン主義はどれほどのことを我々の認識的営みに強いるのだろうか。

Barry Stroud は、Fogelin (1994) の議論に一定の共感を示しつつも、彼が日常的な知識主張に関しても、それを放棄しようとする傾向をときに見せることに関しては、厳しい批判を寄せている。Fogelin は、知識主張が、「排除されていないが排除可能な」事例によって阻却 (defeat) され得ると考えているように見える。しかし Stroud に言わせれば、そのような阻却事例 (defeater) は、我々が現に持つ日常的証拠によって実際には排除されるのであり、だから正しいピュロン主義者は、そうした過剰な疑いの傾向には、反対するべきなのである。ピュロン主義者は自らの立場に矛盾しないかたちで、どのような主張が可能／不可能なのかという問題は、三つの「対照クラス (contrast class)」を用いてピュロン主義を形式化しようという Sinnott-Armstrong の試みによって、かなり明確な仕方で答えられている。

他方、もしピュロン主義が勝つとしても、それは認識論の破綻を意味するのだろうか。Ernest Sosa は、外在主義者と基礎付け主義者が主張する知識と、内在主義者と整合性主義者の主張する知識を区別する。ピュロン主義者が反対しているのは、彼によれば、後者の知識である。つまり、彼が正しいければ、(彼のような) 外在主義者とピュロン主義者とは、別の話題について論じているだけで、実のところ両立し得る立場であるということになる。

また Michael Williams は、ピュロン主義の論法の核心には「アグリッパの五つの方式」(不一致、相対性、無限後退、独断的想定、循環) があるとし、一見自然に見えるそれらの「方式」は、実は隠された前提——「先行根拠づけ要求 (Prior Grounding Requirement)」という正当化モデル——の存在に支えられていると論じる。その上で彼は、別の認識的正

当化モデル、「デフォルトと説明要求の構造 (Default and Challenge structure)」に基づく一種の文脈主義を提案する。彼の文脈主義が維持できる立場ならば、ピュロン主義的懐疑論は特定の前提に基づくことになり、少なくとも Fogelin の考えほど「自然な疑い」ではない。

Williams がピュロン主義を梃子にメタ認識論へと進んでいる点は注目されよう。

本書の末尾を飾る Roy Sorensen の論考は、無知の効用を訴える、いつけん人を喰ったような観点からのもので、たいへん面白い。クリティカルな論点は、ピュロン主義者が目指すような「全面的な中立主義 (global neutralism)」は本当に合理的なのか、そして、そのような立場が可能なのかという点である。彼はそれらの問いに否定的に答えている。

本書の議論のほとんどは、ピュロン主義に好意的すぎる嫌いがあるかもしれない。しかし本書は、たとえばピュロン主義が知識の諸理論の特性を逆照射しつつ、それらの可能性と限界とをより明確化する働きを持つことを、ピュロン主義に否定的な読者にさiemらかにするだろう。つまり読者は、すべての認識論者にとってピュロン主義的な懐疑論が無視できない——有益な——トピックであることを十分に納得することになるだろう。しかもそのとき、本書の読者は、歴史や現代の論争を通してピュロン主義を多面的に見てきたことで、ピュロン主義に関する考察を自ら始める足がかりを、すでに掴んでいるはずである。

註

(1) Cf. チザム, 2003, p. 15f. (引用中のゴチック体は原文による。)

(2) ここでの「懐疑主義」は、他でもないピュロン主義のことである。だが、チザム自身はここでピュロン主義を示唆していない。また、彼はある仕方で定義された「ピュロン主義」に同書で反論している (チザム, 2003, p. 24, p. 31ff.)。それにもかかわらず、彼のこの議論がピュロン主義的であることは確かである。

(3) 古代、また中世・近代におけるピュロン主義に関しては、たとえば, Annas & Barnes (1985) や Popkin (2003) がすぐれている。

(4) それぞれ Fogelin (1985) と Fogelin (1987) を参照されたい。

(5) 評者自身は「ヒュームがピュロン主義者である」という点——その解釈の細部はともかく、この論点——に関して Fogelin と同意見である。また、ヒュームの懐疑論は Garrett の述べるもの以上に強力であると考えている。他方、Garrett の Fogelin 批判——ヒュームの懐疑論が彼の自然主義から発しているという指摘——は正確であると思われる。

文献

Annas, J. & J. Barnes (1985). *The Modes of Skepticism: Ancient Texts and Modern Interpretations*, New York: Cambridge University Press.

Fogelin, R. J. (1985). *Hume's Skepticism in the Treatise of Human Nature*, London: Routledge.

—— (1987). *Wittgenstein*, London: Routledge.

—— (1994). *Pyrrhonian Reflections on Knowledge and Justification*, New York: Oxford University Press.

Popkin, R. (2003). *The History of Scepticism: From Savonarola to Bayle*, New York: Oxford University Press.

チザム, R. M. (2003). 『知識の理論』第三版, 上田美典訳, 世界思想社.

[京都大学大学院修士課程・哲学]